



秋

鳥鳴集

紙葉軒野井
埴之屋一理喜
季秋庵俄又
撰校

秋之部

文月

文月也 屋敷の利のさりき

梅室

文月や 雪又霜のまじり

新甫

ふきはきや 川端通のふり

二村

立秋

秋立のまじり

鳳郎

秋立のまじり

清海

てんまけのまじり

秋月

夕秋 養火もあふり埋めてささる秋
 大木尚大き〜響りぬ々秋の秋
 きやくし木城の風やと秋の秋
 戸のきる場ののり〜ぬ壁左の秋
 古う極境阿らははれてけさの秋
 子起も志たれは出来てささの秋
 見たりなる程堂すんでけさの秋
 初秋や秋の明てあきて口を〜秋
 ほつ秋や起出るよ〜う食古の〜
 初秋た〜暗〜聲〜有る音ハ何
 七夕 七夕也月ハ〜を秋〜志は〜
 茶三
 井之
 峰月
 芳草
 葉刺
 見二
 茶几
 黙池
 茶和
 茶上

七夕をさつ〜茶あり〜と秋の秋
 七夕や〜り〜〜ある島もの
 七夕や〜る〜るよ〜う水た〜う
 七夕は〜も〜も志は秋〜
 星の音高井城波もゆあり〜
 立琴や〜け〜〜の音を〜の風
 立琴よ〜さ〜響のいと添ひ〜
 那系 うれす小糸あ〜の糸や秋の〜
 星小糸うけ〜〜支那ひ〜
 袋小袖 秋の〜の〜
 星よ〜ん〜と仕〜て小〜
 茶和
 林雨
 修古
 甘茶
 蓬字
 舞斗
 一程喜
 細々
 清善
 清如
 一程喜

砥洗
梶系

かけぬのほむす侍路ふ砥うれ
のち一葉程う出れや一宿原邊

花盛
茶地

天河

梶の葉や書終るよ侍路侍原邊
浮草よ似し塵雪や砥土のうは
暑いよも唇う又ゆるやあまの川
深い程可憐也春風の天竺川
ゆる川李平治の世あつたの河
中流の室を尺載え下流の川
あまの川よ字うをいれ阿まの川
冬一羽更下とまをるや 天の川
照り免てあまの川 侍路ぬ浪河

成春
乙也
英山
新高
太
羅村
峰月
望井

子市

子市の人よ喬行き例うれ

春牛

作証
逆火

くまの市の巖壁にて所の抄除のめ
きいらやよらうらりぬおをうら
くまの市の人よ喬行き例うれ
門々の抄除を以てむうくうの
む久のりやぬそ月立て人通り
逆火よりあふ身き堤う水
逆火や懐りう見る子のゆき
む久火やかけ水灯の付ぬら
あかへ火やほくやき妙と焚柱は
あまの川よ字うをいれ阿まの川

文破
毒山
素業
清音
梅室
山月
紫禁
幽玄
喜和
常白

魂系

伏

三

龍柳	たまた柳の明りもく平嶋のいと	赤民
盆	籠やうらのふそふのや盆三日	清言
柳徑	桐蔭おのれりうらみり深世の南	春家
夢緒	さまのいそ懐りあをそりか糸	こ
蓮舟	をさしてまふけまろ里暮泊るを	橋ら
馬	蓮飯舟新茶碗をほそまろ	楓山
	灯ともぞは秋のまろや瓜の島	深室
	川端平瓜の馬車と吸こひ	翁云
	芹菫美つる日も丈も短しをうら著	石介

燈籠	やうはつんふ出を箱よははく早す	菊也
	雲のふけた下を引籠籠	春井
	雲よよひら提灯をうらうら	春我
	白はまろとうら淋しき板明也	静似
切籠	灯ともせんと下子の細之切古水	兼雄
	綱言世をおくふ家もさし古水	知秋
接納	接納し趣てありたり奇志心札	峰月
	接納へすめそ存作る也	八四五
	接納や終日たえぬもあし	照志
門菜	聖之りう人も多りよる門菜に	一理春
踊	出てりやをやうりまはれ風う吹	可大

成とり子や清玉篇子土たた方
 在と清一高の記あそ一とと理
 踊人結かけし竹もすく少一急
 幸とる少や松も又ゆ磯辺うれ
 生身魂若も余頼伸とといふや生身魂
 判籍 せー鐘は寄けき魚傳もよるり
 大文字火 大文字火始よ本つと一あう
 大文字火 大文字火也細とと其かち
 送火 おく火は草ゆみ辺相うあ
 れ久更火やおく種きり人かか
 送火の清るをま川て戸さ一危

乙親
 うた
 其影
 野井
 外良
 古年
 茶礼
 一理毒
 雪堂
 坊松
 静水

冬月

送火の細のちうさちりりり
 菓の露おさーくう雪の月
 青りの市あー廣一益の月
 お年をさあーあ人かあは月
 海なうつてあうく子供あ月の月
 何窓入何窓入あうさそ 又火をん
 相一葉少と葉お二生露一と相涼一
 さいとまふまふ雀よあう少一葉少
 ちる臨の曙をそ一葉の菊
 美り一葉牡丹の散ふれも志り
 花葉一葉眼ふまあを散お一

揚良
 芳木
 交車
 長共
 赤魚
 俄左
 梅裡
 琴原
 来古
 北左
 乙親

菱柳

夕顔よ遠山をさぐるひと葉のや
 枕理二葉一葉ハ川へは流るる
 ま里比とま竹ハ跡トは跡をさる
 ちる柳 葉やま尺申す天童うふ
 炊ふ子外ちりてうたぐり 村のふ
 ちり出 して葉をつくろ柳ハ
 あき露のほそてまや水はう穂
 朝露やまいまぬのあり 十のふ
 朝露や 洗ひ通らとく 石のぬ
 朝ことも朝こつれ 尺もも 法めこのふ
 朝露の 蒼い 朝のぬり 朝のり

林南 一葉 堂井 葉露 草木 総補 杜水 完醜 山月 赤陽 幾月

と舞

あき露の 分よ垣 跡を浦家、のれ
 と舞 やるる 君よ月の白うたふる
 朝露や 舞のハ 通て 喚うまね
 朝の 間をあき 露葉の 世色、のぬ
 朝露や 舞へ 朝のま 垣のハ
 朝さ 露は 飛まは くら 一の音
 朝か 本ね 中り 法お みる 喚うま
 朝の 汗や かま 肉の 踏お ぬり 一
 朝の まと 阿さ くの 舞の 跡を 友昇
 朝の ぼや 志を むら 杉の 葉を 井
 朝の 花 ぼく 果ぬ りん 更の 島也 葉の 月河

西耕 翠山 之葉 大露 抱山 喜望 尾橋 一井 友昇 井 月河

咲ハけく果のりきや 子成を
 小池もみ河のありき 子のすく水
 嵐をむ嵐危花やむを翻れて 葉の喜ま
 桔梗 向風より吹ひきき 桔梗の菊
 打経法向ふよき 糸ぬきやう水
 咲むらう 蒼き花ゆるたきやうのふ
 蒼花 さいはるまき 志たぬきと出ぬ
 雲う家う何達知とや男へ
 遊れふりま 風子も強く 界の之
 色やうぬまの又より 男へ
 女も心 神を待てあたら向は 市りぬき

小菊
 子成
 葉一
 菊古
 梅經
 青香
 の笑
 山月
 一程表
 池碓
 酒壺

山をよ日 掃とてきく水へ
 花中もきめ くれす せみを
 白凌く伏家も ありき
 葉を退く日ハ また子一 標の影
 ときのか 転巻あくも 撓みり
 春をのり ちるき 夫那く 萩の萩
 小原女の 浮て来ぬ ありき 萩乃萩
 終るゆり やり ふま 振や ともまの けり
 葉店くら 樽をけり して ともき 見や
 子秋より 果ハよき 葉の 萩の萩
 川 神や 萩の 萩の 萩

一論
 萩葉
 鳥籠
 白郎
 完臨
 山月
 無志
 葉民
 葉や
 五葉
 左界

木槿

新そふを譬のまきりし木槿外
去つくと嘆く久しき木槿の丸
折れよ嘆の鮮ぬぬおえけう南
むらくと木槿一跡夕日山
菊辺を宿うけしこあり木槿
勝らぬもまのまきり木槿
夕明けの斜に照らすを槿の丸
破れうらさむとりのさげ芭蕉
白を夢のまもあらぬをせむ
方丈の居る為くらきをむね
吹戸外一葉と秋の香芭蕉うね

西辰 閑室 梅窓 山月 月阿 柳壺 二極 好文 善友 小景

芭蕉

破きりかた小景を立芭蕉うね
佛の焼消えて芭蕉の形はまきり
藤けふ高を毛く似れ白ひねりふらばは
蔓沙むまはりのいふ付や蔓珠沙也
除地と少畑の辺や蔓珠沙也
塵於古場所もまきりや蔓を沙む
かうまんの塚休けや蔓を沙む
外きりよまきり下まきり鳥の
戸袋を糸瓜の打た月秋うね
まきりの中子寸の糸瓜うね
秋蟬 まきり糸瓜入りたり秋秋蟬

峰月 左燈 逸洞 一具 不月 善芳 善友 芭蕉 孫園 法書 梅窓

天瓜

秋蟬

小庭の目

葉をたれし振る竹ありは秋の塚 あり

ささりを掃きて晴る秋の影あり 虫あり

ささるの末放ま寂しあきのそと 鳥籠

あまよふ鳥ととけささり秋の蝶 香芸

秋の松の表は灰の痛りり 蒼朮

とりの鳥見し程なぬ秋のそこのめ 一井

秋津虫は体もさあらしおのびて 宿吟

投出しは是れもふとふはつと 去吟

池の上を空にふして赤い竹 俄反

桐の月とささるはあらぬと 梁和

虫 むしりて 寄柳

夕月の隙にささるの了念 重あ

虫の音もきあや 棲友

あきよむくあさ 逸香

簞にけて結着ははく 芭盛

人中の虫あらし 山崎

さあしくあさ 聖井

すくまや亀よ刺ちる音のしまり 去吟

秋虫 中庭のささるひな 一井

秋虫 中庭のささるひな 一井

秋虫 中庭のささるひな 一井

雲霞

碑

甯馬

陸海

ちかきとちかばにひき聲のうらまへ
 向風の止傳こり
 出ろろきののちりぬり
 ちかきとちかばにひき聲のうらまへ
 葉を打ちまよひまねてまゝ
 戸をひて歩ハ内おりふくい
 家うはれ李の先へまよひまねて
 雲の影の戸せし始りやまゝ
 鳴言結て雲も散るはまゝ
 水打せ向てきまゝあり
 ちかきとちかばにひき聲のうらまへ

聖井
 長松
 高竹
 流水
 明月
 梅道
 山月
 竹陰
 柔也

新子一瓢館

かき宿よ形きて
 少人の旅よ
 由せり
 新子一瓢館
 破き雲の月を我世
 こゝろ中のきもす
 葉を打ちまよひ
 ちかきとちかばに
 ちかきとちかばに
 ちかきとちかばに
 ちかきとちかばに
 ちかきとちかばに
 ちかきとちかばに

石友
 茶葉
 悠志
 涼花
 長松
 二松
 金石

燈

か

十

樟根やうの白ひすう記六筆さき

うはさきやとほ風まよの旗

田舎道 ありや田の古くは野にき

秋吹 きたりや秋の表も きたりぬきは

そゆ 小き乃懐舟入は葉のる

はと吹や塔山をくして細出の

秋景 袖に秋の香の間にふ秋景は

まよ月よりやうは徳と錦若く

秋葉のけけけけけけけけけけ

きたりをゆくと思ふは扇の形

白と青くあきと忘れぬる存

志る人も人よりををよ扇の志

於園扇 ともくともより集るは

心ゆくまの雲散く心帆は舟り

秋景や時候かき理の立とぬり

雲きえと福つまをかき理るり

いさるふや登るを免ぬ中た

秋景をよりんて通る 望月の

秋景やあらうとく動え 庭の

秋景のききて冷とよ木のるは

在里の福つ末やよりて更り

秋景や阿那とのをハ河月在

峰月

白瑞

長懸

葉欣

一登

俄友

招什

士云

宵那

琴平

享逸

守山

望如

雲散

葉欣

秋三

以静

葉五

悠志

源重

寶吟

葉謝

初嵐

晴の葉の吹く一ふ葉をうばつた

山寺戸の吹く作さりし

蔓草よ垣の志ありや初あらし

秋の吹く秋の風

秋の吹く秋の風

秋の吹く秋の風

秋の吹く秋の風

秋の吹く秋の風

秋の吹く秋の風

秋の吹く秋の風

秋の吹く秋の風

秋の吹く秋の風

秋の吹く秋の風

秋の吹く秋の風

秋の吹く秋の風

秋の吹く秋の風

秋の吹く秋の風

秋の吹く秋の風

秋の吹く秋の風

秋の吹く秋の風

秋の吹く秋の風

秋の吹く秋の風

秋の吹く秋の風

秋の吹く秋の風

秋の吹く秋の風

秋の吹く秋の風

秋の吹く秋の風

秋風

水字をぬきし

秋風はあしく

秋風はあしく

秋風はあしく

秋風はあしく

秋風はあしく

秋風はあしく

秋風はあしく

秋風はあしく

秋風はあしく

秋風はあしく

秋風はあしく

秋風はあしく

秋風はあしく

秋風はあしく

秋風はあしく

秋風はあしく

秋風はあしく

秋風はあしく

秋風はあしく

秋風はあしく

秋風はあしく

秋風はあしく

秋風はあしく

秋

花火

浪高し山手より

見込よ雲あもて

志ししそよふり

打留ハちりよ

能田姫

積屋祭いよ

かみおの

秋

秋

秋

秋

秋

十一

去程

然とせ出さるるをうへに杭すまひが
 何と書くとも有りたりお横取
 森としたりを程よと了なせ辻角力
 うり杭の取まぐりさね関お横
 角力とり道と窓と雨さよるり
 曙や一窓の海草生々好光の
 白舟や風も降らぬ八重むら
 舟の音少くも更なり霞あふ
 空高くもつと更なり霞あふ
 とも一火はまよ外にうらなう
 志すつ面も花の影のまゆく

舟左
 細竹
 塔如
 小童
 号本
 ろ大
 幹斎
 香美
 子巴
 丹桂
 森山

霞

早の戸や霞の中いりり少く致観
 窓の道深し遠きる若けりり
 三尺の戸口はさきやほ由り
 夕日のあけくをて清遊しり水
 立寄りつゆのりさき花をが
 雲白くよくまきく鐘の聲
 白梅の雪のりり切通し
 舟の音あひひひ松乃香
 八月の雲あひひ水泳めりり
 八月の雲あひひ水泳めりり
 八月の雲あひひ水泳めりり

総補
 瑞ら
 景剛
 知秋
 左竹
 然と
 松月
 燈井
 以静
 桑古
 三葉

窓

八月
八月

ハ熟せ倦けよるる秋さ 銀葉 露汁
 細干はそらけく程ふそ秋の光 露山
 田而日定清し二見み秋もふのむのり 露
 竹喜 叶も真不二嘘さ日を計へけり 九江
 初月秋重やけの光さのけを了初月在 浪岸
 三日月舟亭ささん橋さすし三日の月 智秋
 三日月舟亭ささん橋さすし三日の月 浪岸

子船

二日月也そねとるる万は右左 山月
 三日月也深淵すくくくくく川 下船
 三日月のささみもあそりのみ 葉山

入燈乃冷りとさるるや三日の月

以

みらば秋の舟とりのさるる葉の園 文車

見定めてうくおうこの角三日の月 俄左

三日月や山こりきく眼の冷し 葉欣

待音

あつあつのものう候おく庭を汁 浪我

待つよちや ちぢくさて深ふ暮 葉也

待よらぬ何とち形しよあゆてら 雨耕

摺抄や結ぶらぬうを津那舟 一草

そら月山水の音くちあけてるあ 峨架

松尾好難水てさあけあのは上 涼花

あふくくくくくくくくくくくく 一海

吾の中子傳りみのほきよなる 法喜

燈の浦を風流しと崎かきり

波もつらあり

さぬしきや月つ入にまうるき 蓮宇

あゝお遊よて

まらえ一松をもちる月の露のよき 流繁

海をえてらやありて里は月 百美

音月や其地伝はるく其色もりの 子巴

ついでてふつ子月よほくききり 待良

こく松や一梓ほり ぬ遊

や中へまると月見のそ残は 藤源

更て又二階へまると 月をくらふ 風印

礎をまき事はうへに月見のそ 喜里

海少女の情だとはまはきみぞ 沙山

月見かゝりぬ日よ向ひけり 遊盛

世を以とひて蓮門ふ入る地す

唯年比路那れし一節の所を

糸よりつて糸を巻ふますへぬを

月の跡髪は拂てほきり向ふ

名月やうまねうは里し 園西 美屋

市中隠栖

すねより少作言の鳴や 稲乃花 外旭

粒々の種よなるこ田や以絲乃之 六六

水と多引くよいの田はく水 一

里人のきけこりてくう実の八子 清考

以の結浪田沖の社は、きりり 花兄

いねわくやまの結穂の重み 如衣

刈ててん波し廣き川田う水 永世

うけいさぬくとよおよ扇風形 琴聖

い糸無天 富貴は知りぬ草の門 永梅

稲垣やとつちよけ言右左り 吉年

刈ぬ田をい稲穂拾ひぬ流りり 一程喜

新米 新米も見ての河んやや鹿急立 新南

小糸粒よ不穂し 一やと糸米 芹舎

たはくまをぬくちよく米 香甚

葉抱きく返るああ里白 菜菔 月阿

稲乃兄や雨の末実乃りの 新 西系

丁束おたの免の百もさくん 華あひり 清考

鬼灯 鬼灯の青葉の葉よ 清和 内登

水引子代かけて糸引まの 咲はるり 一程喜

新米 新米の糸引くまの 家も新米 一程喜

新米 新米を直さるり ぬいとや吾母ま 茂徳

梅燈

毛

毛

新新よ参りぬくく〜我母鳥
 枝より有りいやゆ梅燈
 花露れまぬあ〜や梅燈
 生中よふき衆足申けふ事うも
 けふ衆の庭の〜花〜花
 志ふおむと志〜ぬ〜志〜志
 文ハ〜り〜り〜り〜り
 志〜志〜志〜志〜志
 種毛やぬり花〜花〜花
 夕かけゆ〜見〜見〜見

俄友
 号田
 井燈
 洗我
 通吉
 如白
 得華
 喜里
 羊逸
 宝吹
 見二

尾花

茅

志ある仲〜結〜り出〜る尾花
 吟〜と〜こ〜ら〜尾花〜す〜ん〜て〜ゆ〜き〜り〜り
 於〜是〜尾花〜よ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 子〜母〜〜〜尾花〜は〜な〜の〜親〜を〜花
 尾花〜して出〜たり〜り〜り〜り
 さ〜せ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
 七茅の中〜手〜伸〜ぬ〜久〜尾〜も〜な〜ら〜ぬ
 新〜葉〜の〜し〜ら〜り〜り〜り〜り
 刈〜の〜や〜を〜う〜〜と〜〜と〜と〜と
 長〜生〜々〜る〜酒〜の〜葉〜は〜成〜葉〜菊〜の〜花
 巾〜り〜ゆ〜けて〜又〜去〜れ〜る〜小〜茅〜也

尾花
 一論
 竹精
 吐山
 交車
 聖井
 逸洞
 蓮宇
 幸海
 成年

若夏を松山のあまねくおぼすはつとすのむ 可

存ふんふとく夕日や蒼蒼乃花 由章

葉垢 息才を乃の仕合とや葉あり 清春

飲人のあ言お理もあぬ葉り花 七巻

望分 非かしては末の志ぬぬ家略は 林曹

水草や那系乃あとの志ぬ咲 吾家

寧言沈望おき結波の日和のる 巻一

懐正松の芽ぬぬむおとまう系 案詠

夜も又い子を来糸居お分属菊 葉都

ぬそふもしく紅野分の一福り 如白

極のまきふの望や一のとき終 素水

板生舎 五律 一生うきをさう暇つ月明り 左一

壁もちのきあらぬありぬ板生舎 静々

板鳥 ちのきー香ー何の籠歌きうり 出巻

弱曳戸強も急きさて少く成り 物良

碓 板子ちの屋のよぬるや板籠所 末陽

燈と暮れ方南ちううあまぬる中 常白

なきまきちの葉を終まむよぬる中 葉都

在るううの風のうけを也遠碓 板巻

板鴉 節句鳥のさほあを板の籠うれ 月露

一とちハ木まよいて言り鳴子繩 左一

あ邊いりうをさ出りて引鳴子比 素左

秋をくく鳴るを風は任せとと 一 藤

菊謝して有る鳴子の小雀のま 聖井

夕のさびかき足元見ぬれり 芥舎

去来まよひまきかき 藤原

石きりの祖小見下才かき 無志

向えてはくくをみかき 小春

不覚用ま志て面白き 小春

懐かき森まらるるかき 青和

拙りまとい板少かき 聖井

勢ま志るはまき 小春

燈帛 鏡帛は馬のけしきむる衣まき 西条

わかき 中義よりまらるる身 一理春

籟雲 海を空志たき 友竹

初涼 蔓草の根より初涼の白ひく 翠刺

初一日よりまらるる海まき 翠刺松 照志

流氷 尺明しへ山田の氷と流氷 磯子

家一つ出でてはまき 水 洗糸

叶寒 月とまきかきまらるる天 清島

初寒 秋空 中 晴出の終り 戸中 静

あきまきまらるる初寒の終り 戸中 静

秋まきまらるる初寒の終り 戸中 静

菖火も埋る天鏡まらるる秋まき 清島

霞

つゝの光射す空のまよふ中をゆく
香葉

秋

霞をよむ古の眼ありき
秋をよむ 自長

秋をよむ 松のうらみ 清言

松のうらみ 秋のうらみ 寶吟

雷をよむ 雷をよむ 一理喜

雷をよむ 秋をよむ 春友

秋をよむ 秋をよむ 井植

秋をよむ 秋をよむ 秋月

秋をよむ 秋をよむ 素琴

歌

秋をよむ 秋をよむ 西馬

秋をよむ 秋をよむ 赤雨

秋をよむ 秋をよむ 林音

秋をよむ 秋をよむ 英山

秋をよむ 秋をよむ 兼文

秋をよむ 秋をよむ 兼河

秋をよむ 秋をよむ 一知

秋をよむ 秋をよむ 梅程

秋をよむ 秋をよむ 秋月

秋をよむ 秋をよむ 秋月

時

時

時

秋をよむ 秋をよむ 秋月

陸崎とく水丁よなる雪末の山月
百多原傘をりさるる 滝のたまり 竹南

川のたまり水の流るるや水ぬき
川のたまり水の流るるや水ぬき 友井

瀬村のたまり水の流るるや水ぬき
瀬村のたまり水の流るるや水ぬき 波田

人衆と一なるついでに水ぬき
人衆と一なるついでに水ぬき 末論

和たるより水ぬき
和たるより水ぬき 磯西

百舌鳥の鳴く声の響きの山月
百舌鳥の鳴く声の響きの山月 山月

月白 ひとしづか押しあがりたる眼白
月白 ひとしづか押しあがりたる眼白 一文

啄木鳥の鳴く声の響きの山月
啄木鳥の鳴く声の響きの山月 望井

小雛やとて商人のともや旅路
小雛やとて商人のともや旅路 山月

濃結とく水ぬき
濃結とく水ぬき 聖井

沙魚の鳴く声の響きの山月
沙魚の鳴く声の響きの山月 丁加

漁師の鳴く声の響きの山月
漁師の鳴く声の響きの山月 古采

六

鹿

又らもや藪をまゐり万石山のま
 方よりよくの難く若半や森の色
 木杖より登くおぬ戸志の聲
 峰崎よりまきみまぬけて花の聲
 一帯やまらも鹿々居るやうも
 野井

九月

山ともぬく森一九月の中山
 鳥つもの文記 此は九月
 秋更々よ味晴よなる九月うれ
 何々も好きぬやうあり改の難
 難引尾もあうや所もある
 山月

鹿

菊

山ともぬく森一九月の中山
 鳥つもの文記 此は九月
 秋更々よ味晴よなる九月うれ
 何々も好きぬやうあり改の難
 難引尾もあうや所もある
 山月

鳴する人の影さそ葉見う那
 十日菊も中つやと云結舞うぬ 十日會
 草の葉汐渡の葉の●付をば茂みらふ
 苔ふ葉もあらす進志とさ理し聖のつれ
 徳き木めらら海山也苔もこら
 傘の結もら葉りそけつ不みち
 ころころとこ回降善やたら紅葉
 徳きよりも序しと深し苔江葉
 通天橋
 谷ふよ苔葉蕙とくくもらう菊
 尺の人の強て日ととと毛智のふ
 葉丸
 梅室
 藤源
 宝吹
 俄友
 蓬宇
 赤仙
 井之
 文海
 吐山

屋よふる葉やらりの概もら
 月夜人夕日よら辺もこら、のぬ
 為をりも留ぬ藪木も紅葉う南
 聖山嶽海色よ修禱よ於まらやまは
 免久ぬ松以呂久ぬ急不精くぬ野松のぬ
 色うふ松 築山乃かき里り形
 后月 小路幾日あきて浦辺や坂の自
 二階よりそまをのりや坂の月
 散ひらハ邪六よおもそ尾枝の月
 十三おきのふ月の出よら十三和
 一面の雪よ一刻の光をふり
 十仙
 一徳
 可考
 赤月
 透流
 楓巻
 松山
 閑柔
 語疎
 確教

くらくく〜と風鳴や十二春 山月

外市 外市の川にてふらふら有月 映うれ 清書

橋子 けふあてそむむ悔のさうのわが 兄二

新酒 氣まの〜さむね橋板根つがれ時 一程書

一徳利 ぬきし小さたれ酒うれ 茶凡

あまの〜くちるるる〜 碓石新酒 萬海

門川もよくまむ比の新酒 徳下 梁堂

新蕎麦 新蕎麦やからき齒きたれの一徳利 井城

粟 碓しき〜く〜と埋しり鳥〜ふ 系極

村 最粟をひらふや怪れうらと外 井城

果〜や口承か〜ま〜か肥の毛 完醜

遠〜く〜く〜足出れや村の取跡 酒我

人のりまは形〜こまさせ 枡酒 文車

油味 花〜う〜と〜と〜結茶油味 粉左

末てんせ〜〜と〜と〜ゆ〜の〜の〜 乙極

方丈〜の〜ゆ〜ゆ〜み〜ま〜ま〜か〜 一程書

外 外の本のゆ〜ゆ〜と〜と〜本〜の〜 茶吹

山 山道や本のこ〜と〜と〜と〜の〜の〜 一程書

標 風毎〜標の〜〜〜〜〜 友録

能 能撥もむ〜〜〜〜〜〜〜〜〜 築平

己〜お〜う〜を〜痛〜て〜を〜お〜ふ〜ぬ〜 橋島

秋 野井 二極 在島 一理 香

生葉 初草 松草 草花 菊 小葉 因代 打細代

のーまるやうなさうらうの山が 初くけやあくの扇よまさを 松ふ々やようねたまなまさを

みそけよの鳥もあり嵐ふけ 草花初や初鳥の鳴ーさ又と那ー

のさア又出て草花と来より 菊の葉一取あふるを玩めあは

ひらきさう川向け仕舞き此こけ 小葉初あふるも秋とまきりり

因代打細代うつ綴くくし 後のそふ

秋の 秋の 秋の 秋の

秋の 秋の 秋の 秋の

秋の 秋の 秋の 秋の

秋の 秋の 秋の 秋の

秋の 秋の 秋の 秋の

秋の 秋の 秋の 秋の

秋の 秋の 秋の 秋の

秋の 秋の 秋の 秋の

秋の 秋の 秋の 秋の

秋の 秋の 秋の 秋の

秋の 秋の 秋の 秋の

秋の 秋の 秋の 秋の

秋の 秋の 秋の 秋の

秋の 秋の 秋の 秋の

秋の 秋の 秋の 秋の

秋の 秋の 秋の 秋の

秋の 秋の 秋の 秋の

秋の 秋の 秋の 秋の

秋の 秋の 秋の 秋の

秋の 秋の 秋の 秋の

秋

湖のさ戸月の公ぬる秋の山 一覽

秋 何きの如やわしきれてたえり 善治

秋 清らき場の干町餘り ちあきの水 見外

秋 秋のあり方も天中日わりの 蓬字

秋 秋のあり方も天中日わりの 清水

秋 秋のあり方も天中日わりの 若枝

秋 秋のあり方も天中日わりの 未曉

秋 秋のあり方も天中日わりの 文友

秋 秋のあり方も天中日わりの 直鳥

秋 秋のあり方も天中日わりの 遊童

沖垣や画馬重なりては のり 徳輔

夕をねやふり山出まゝてあきとむ 鳥喜

老 秋 ありきと明かすありきと 永世

九月 月 野山ふく風も 多あり九月 足柳

源草の里をへてふらぬとて 志はくさ

名の面ふもんハ 志はくさ

穿たれとのあて

秋 湖 源 雲 神 小 雲 の 子 ち り う ら ち 屋 茶 の 大

中 の め ち ち 紫 雲 の 空 汁 ね 花 の 秋 鳥 山

そ 見 色 の 暮 又 ぬ り 秋 秋 高 土 鳥 芝

流 り と 秋 亦 傳 け 了 烟 草 ち 水 鹿 喜

秋

秋

いんくみ不二阿... 秋のやせ
 秋深くもや... 谷中社ありや... 秋夕の秋も... 秋も寂しく... 月も秋名...
 不 是 外 城 共 月 友 海 唯 岸 可 号

鳥鳴集

紙葉軒野井 撰
 埴之屋一理喜 校
 季秋庵俄又

冬之部

十月 十月也... 十月の... 十月や... 十月也... 十月や...
 茶 丸 乃 水 茶 丸 乃 水 茶 丸 乃 水 茶 丸 乃 水

十月や電乃もやの 生もくも
十月や電乃もこりらの傳屋よ来る 毒月

神皇月神也月新書——くまを左受下く 成道
けつそむもその傳もさしり宿 始華

初冬や何と降りぬ松枯かけ 抱香
初冬や何と降りぬ 可香

小春 ころころぬものや小春の縮着 青宣
輝ももさぬや小春のりり丹 完臨

よもいり吹通——てのや春うも 月采
来高あひひ散也も居る小春は 竹良

取もや春も春あよこけり小 小菊

白風の間よそとむあたるこのぬ 春和
采る日波ぬうう 小春ふ小春は 春春

くわ——ゆかま根岸乃小春のぬ 山月
くもるりれ海のぬるき小春は 春景

燈をさして出れや戸口の小春は 春東
にまの系もけ軒の小春うう南 汀砂

芦の種枯ふうけり春も小春は 小春
丸はら日大井やまのさけり小 三葉

燈解れて出きも小春のり日 聖井
小六月山又高折るちありの小六月 葵北

小六月度のき——とよおれり 菊云

明らも阿りと世も中や小の月 来民

神送 袖小多の風を分れ死らみ送理 兼兒

松平傳元服のころは長兄をけり歸るは憐 侯言

夷洛塵か下は清もさかす 角丈

卯留守人まらふ又申り言ふ 逸路

松平と寂多まらふとくまかこつ 鉄平

言ふ方のきれいな好く神のあはれ 吉和

名を付て遊ふ口も那神のるれ う造

芭蕉忌月志が終もは茂庵の舎式くれ 茶凡

めさ心と流ふのまきり雨のり 木曉

念趣ておとす園へある時白 巢欣

藤舟の折きて吹雪り 林一くれ 六島

をのりり又阿ふ松や初れ 松山

信令傳言うまは終ら来り 四かん心志う 以木

十板 人込の暖い中り 十板う那 後斗

ねも 聲うさうは十板の氣休は 乃水

為野の中を十板のゆき素のぬ 静交

玄猪 物喰もいや 一のさるま猪うれ 申誓

以取 裁燦幅もつ 縁てあはる 波中り 越 波回

神作 志ふまらぬ奇雲なり 神むうく 一程喜

一のさるまらぬ奇雲なり 神むうく 乙瓢

一のさるまらぬ奇雲なり 神むうく 山月

燈閣

燈を灯けていづも安き月日
灯を灯けていづも安き月日
灯を灯けていづも安き月日
灯を灯けていづも安き月日

お一素寺村芭蕉庵よあこせ

くりまき緒つ

初時鳥 金松の湯よとく 燈のまつ時鳥
初時鳥 金松の湯よとく 燈のまつ時鳥
初時鳥 金松の湯よとく 燈のまつ時鳥
初時鳥 金松の湯よとく 燈のまつ時鳥

海山の口御を利根のいれ
人里へかゝて乃かた時鳥うれ
もなきをいそぐ五木の葉寄水
馬鹿之間よとれ下り時鳥
舟よるあて灯すもいそぎ
船よるれ飯交かきえて時鳥
志くく下ま舎船の燈
引盡の燈をきりき 志くき
志くく下ま舎船の燈
志くく下ま舎船の燈
志くく下ま舎船の燈
志くく下ま舎船の燈

一 九もくや舟の烟の水は這ふ
 風 のさる重あしよつく時雨此
 一 一く水さして鳥ゆくまきふ
 居ありて時よよまふ也 鳥を
 待合たの和のうづ障子 城の音
 空の雨時向待て通るや 推るも空
 ありれていやきうきりぬ門待色
 空腐屋のまゆり 待時やまら
 か茂川の流電葉青し ても水
 けつ表や雪をまね ぼき葉うり
 初雪おぬまけりてゆくかたはる
 不足
 鳥良
 水橋
 鴉鳥
 酒系
 西耕
 老魚
 野井
 菊雄
 竹前

水潤
 初氷
 初雪

舟待見ふものゆく ちる 葉葉の
 ちる中をまふらん ちる 又 葉葉の
 ちるふと銀葉の ちる 葉葉の
 待とてのりゆき ちる 葉葉の
 是はちと思はれ ちる ちる ちる
 此葉葉と葉葉をあるまら ちる
 多入言身延教えぬ ちる 葉葉の
 山嵐の軒端のぬき ちる 葉葉の
 丸うあふ月也 木葉を 葉葉の
 程うあふ子桶也 ちる 葉葉の
 ちる ちる ちる ちる ちる ちる
 二柳

木葉

風

二柳

石を竹のまろくしをよ樹あり
了かすーのり海より感所
おくらーやしー小さ木礮の家
木枯りよましくしな海大松
風也よそりー霧の音森なり
こーのーしーやのこよしく鐘の音
その木立別漂ぬふや月先雨冬木立
田中の能やららちゆくそ木立
流形もえそぬぬぬ抱古より
吹さしそそりのま葉や冬木立
おふーしそ火籠もえそそ冬木立
この道

冬枯

冬をわたりて枯日の白く聖道のふ
い申う終もまの申のしーる義を安
ぬ遊枯や雲る日せーの相たぬぬ
そろ霧の野やつーくくと高土の山
支國楊屋り
冬の霧の何もろくすと八百度市
あももろ洗小けー霧の雲り樹
山をさゆ風もちま日か葉もしゆり
やのまーう根を枯くうらぬ枯
朽堅や石をあきり又鳴くのうり
草枯
そこのれそ火城より舞すそ雨り
小骨

枯尾を教へてまうて仕舞ふおんむ 風郎

近水の傍も形一の體をけふ 外里

汐時と又て是るやかき花 竹友

枯竹 とき居り竹や 禁よりや志 静更

この礼いづく甚や河より人毛取 電燈

杜蓮 かまね子弱た芦のきうりのめ 一程甚

この蓮や池の倉よりけり 名二

枯野 かわ蓮舟降き巧く 通り百 梧友

藪をりう泳りてやにうの礼野 主意

枯野 蓋てあつ草も膝ふふかき 文海

足印の火めちうともおぬぬ 甘菜

日乃親のあちと地暖き枯野 山月

吹やそ何の気もあふらきの 月影

少は春きう色し然れ枯野 長吟

あふりのあふのゆく枯野 長吟

月次てよく 廣まらき 志

及びは造るやうに 汀砂

我ひやう風よ おをる枯野 清吉

空のあまはもあまの體のうれ 幽山

復花 二人あてあふり 見出ぬ野 松竹

教 ちうらあふり 咲るうま 茶月

結るりのそとをひらうう時 草古
 うたへふに減小やきうん返りて 草古
 吸けうむ口ハ持けして久しむ 岩松
 尺さのよと一もやまをひらめむ 菊
 歌く木のうらうらな序一や久理む 長共
 のふるをなほくや夢のなまのり 清素
 出るゆとふふたはわかへ里も 子前
 ハを木ののるる日のまなくやハ手候 西上女
 持て 持て 持て 持て 持て 智秋
 冬牡丹大きくをけ露と降一そ牡丹 池を
 仁虫う 送出 一見 一見 一見 一見 木曉

水仙 水仙や春又秋はぬとむのさ池 号白
 水せんやう水いさきとよむお形 長共
 水仙や葉も見そ 一さりの形 長共
 冬かたぬ毛と候り 水儂 長共
 水仙や見てはききうきく 山月
 け全くと障子明 一五仙む 菊丸
 石を山より取りて 石を山の 修古
 知世まつぬをうらうら 一石を山の 雲清
 仲後下 葉かたの形 一石を山の 一程喜
 山か 一五尺よりあはれ候もの 一程喜

枇杷むは巴のむ茶方めくさくおきけり

枇杷のほろちるせ忘れ一風情は

挿そさく札くま那くひけりさ

館好の時を来よちりむとの茶

茶む 茶のむや人もほりきむの寂

ひそくとあや一茶り茶は木は

茶畑やあさくはを人も居才

品の咲迄も実のあくる茶の木は

茶のふゆのあは木のあきと屋敷は

山茶花山茶ふみとさ茶はは捨りうら

山茶むや手の印程の庭のうら

山茶むは散りりれすく垣根は

あやあて山茶むはあさくおるは

左程の一里り程みで居りうら

さめつめたのせくく茶は根引

茶のそやあてきりうら土大根

茶の 茶平ののち里や月のほあさく

茶のそ一高や奇茶はあさくは

河橋 茶つまははく寒くくぬ白は

茶た口あさく茶はくくはの略

文右 源右 俄左 芥舎 河砂 風沈 総鋪 長吟 野井 茶平 沙山

踏巻

代々て風よ吹くく小野うねり
 秋のそは舞うりやあや野鳥
 中りまて魚をもおとし池の畔
 を一音やうれきくもふはつ
 雨風のまじりてさるちりり
 子なる夢やうほ更ゆく所なき
 吾れおのさけし傳は鳴り子なる
 聲のうへくくもふちりり
 朝のよよきくもふちりり
 在洲きちるふくと四つおの御か
 なるふを鳴けり月を汐み入る

石介
一龜
翁云
春友
梅室
友并
藤村
琴平
長洲
明彦
松圃

水鳥

多て横り御の移る海はる
 湖の秋のまにやうも鳴ちり
 騒う支葉家放礼ておおき
 ふけて又をくぬりぬ碓子り
 むれ久の御のこまう御の
 水鳥や人の世とと水の上
 春朝日水鳥強くくもりうねり
 所を渡や水鳥はつあてさる
 浮麻音向ふへりも阿はさき
 松立やりのふる夢の秋は春
 三月くくと日たさふと上は春

松圃
春年
高瓢
本庵
逸淵
うき
聖井
悠々
良大
葉次

木兎

ちくと月より水や宇を流し
 ぬる花を家中におぼりきねる
 皆し濁りしもよみくし字を藤子
 何れちる指ゆつくの秋のうめ
 木兎のあまの鳥よりおのこり
 木兎の園より一と虫眼の光
 木兎のや月よりと上野村
 三十三才のさしと流しをけり
 聖堂てんくすくおの三十三才
 みかき以椽の下をく日をもく
 ころ堀の堀と歌をくそをく

藤子
 俄反
 里井
 西馬
 梁重
 木盛
 一羽青
 鳥曉
 重安
 弄古
 疎古

無吟

曙をのそと舞きありみかき
 片の舞や秋をくし戸をけり
 さきもや和つたふさくし
 昼出きのの田舎をくしやふゆの

妙井
 楓山
 疎菜
 完臨

雲月十六日先賢の足ゆり

しつと指てく日をもくし
 昏く秋のまきくしきねり
 粘利をよつたふさくし
 ふりて秋のまきくし
 古きく造りてく日をもくし

山月
 萬海
 藤源
 一知
 喜香
 峰進

けし

けし

峰進

築後

細代

ぬーはちのちり 静水如堂香外 西了
 築後やりは出ぬあゆ 山々仕り 西耕
 何星よ寂ぬ眼あすま言細代守 宇尺
 蟹の名もたてて天つとくあしりち 桑古
 うそらーよ菘畑や阿しりち 二柳
 ぬけハ月もかきくきうを細代も理 玄壽
 お興鬼月ハ寂う本わけよ来ぬ衣掛引 竹古
 成山 不長とさき之介あハ 照る日以少 逸洞
 明也のやち静まうへ 移むれ山 梅笠
 流をたてゑまきる言や 移むる山 空草
 言を乃明るる山 の言理り 之柳

冬回

正月

冬

待者

ころ株の遊目より 冬田之形 角雄
 流苔を干流場へ 借らるる冬田形 号屋
 東月も ちあつとたぬハ 如葉の丸 梅宗
 東月や 出揚つてくろふ ちも在更 篤雅
 以正下等をもぬるき ことり 橋友
 築園し 徳よ 呼とまう 一、る 藤源
 山へあさ 見た目の通ふ ちもむ 智秋
 流うちあふ ちよ 移移 ちやう 柳山
 西しげ ちよ 移子 ぬる ちよ 移 桑民
 け ちよ 移 ちよ ちよ 位儀の 梅室

たかまきや母のちづら桑の道は	猶良
はりの子若や教多丈のふはり美	の笑
しるは湯無や門より馬の稽古志	如慈
仰火焚ね松の園よは火焼業元より	一程喜
子焼心多くとへのまふこ上りん子焼心	而耕
は買ふも家行徳也	俄友
吹草祭獎結て子子も娘以てお祭り	待ら
神系 一舞の神楽のうへやぬかると	言大
びと拍子歌うへり里の神楽	高歌
神教 こそおすかハるるきこし神打	野平
見送るや神をかまひの	奇三

やあて只一人もうちらりるを	ワた
うら白てりけいよ月の新教き	危云
白兄若新えとやけつそア宮丸	峯町
白兄とや日はかた花のにおきを多し人	を終
ふけくいて間をとり参りぬまのそ	梅道
耕一や耕よ志も一ヶ月の耕	相什
志も如りやむまむは種之葉の灰	の物
骨業と一程月白一志も乃花	峰月
すみ切てあくるや葉のたえ勝	立志
物しより志まてのそゆる修心	知春
去り修や志とある一しもの高	梅之

ありゆく塵中も たるや家如も 平三
 志茂風や夕の くらむゆる 芦乃香 智秋
 くらむゆる香の 庵ととる 池水外 如燕
 ほろくと蘭の 灯をいー 名の新 一程喜
 菊の白ハ水と さらりの 行志ととる 野井
 日の言ていり 初をとる 味ととる 尺二
 老と新香の 名はけとよー 秋乃香 風志
 唯香と出づ 後ちる 行障日、の 完路
 富士のゆき 雪や然れと 香よとる 池端
 かけー 兼海を 海ととる ちうり、の 影舞
 けふをうー 人よとる 名ととる 抱雲

雪

頼るゆき 夕香 塩梅の 進ひとる 清香
 ト中ぞ 紙投出ー ちう雪のうー 氷世
 秋嵐や 香を ちもー トの 礫以家 ち屋
 雪より 水 阿とて ちー 支 後 子 影 月
 と ちう 終 也 ち ち 力 け 尺 二 降 西 我
 香と玉 也 ち 所 ち 阿 ち 一 ち 秋 一 尚
 雪を ち ち ち 山 ち ち ち 一 一 程 盛
 くらむゆる ぬる 白 湯 水 味 ち 香 ち 宿 一 程 喜
 呉竹も 秋 寸 秋 以 ち 好 香 ち ち 門 野 井
 雪 ち ち ぬ ち ち ち ち ち ち ち 中 秋 山
 ち ち 祿 ち 川 ち 時 ち ち ち 息 春 國

雪打

雪丸ハ下ノ弦ノ齒ニ踏キて是を雪茶丸け

雪ノ中ニ踏キけして出けり心の外

鶴ノ踏キて出る所き丸本

柔シらし礼言て出る所き外

行町也色之上きは多数給し魚

軒隣 莫山風長きる 婦女き水

雪車の中へ入りてくと崎りれ

ちうちうちうち任せ白雪車の中へ入りて

後を見りや雪車の中へ入りて

後の中へ入りて傳へる也言入るち

赤友

桃巻

徳輔

山外

杜水

高雄

細竹

清高

柔丸

新南

初山

換

換手 換手 兄たよりきらら

換手 換手 兄たよりきらら

換手 換手 兄たよりきらら

換手 換手 兄たよりきらら

換手 換手 兄たよりきらら

換手 換手 兄たよりきらら

換手 換手 兄たよりきらら

換手 換手 兄たよりきらら

換手 換手 兄たよりきらら

換手 換手 兄たよりきらら

一休

俄友

一休

立定

閑月

清壽

梅之

初山

俄友

赤友

清高

氷

氷ノ中ニ踏キて出る所き丸本

氷ノ中ニ踏キて出る所き丸本

氷ノ中ニ踏キて出る所き丸本

氷ノ中ニ踏キて出る所き丸本

氷ノ中ニ踏キて出る所き丸本

鐘

鐘ノ中ニ踏キて出る所き丸本

鐘ノ中ニ踏キて出る所き丸本

鐘ノ中ニ踏キて出る所き丸本

鐘ノ中ニ踏キて出る所き丸本

鐘ノ中ニ踏キて出る所き丸本

歌

梅もまたあふ錯の春を飾りて

けなくも雪は月夜に照れを

一きりし隙面をてあられうも

隙火しこるハこそおと暮しけり

暖きおとあつをぬる

長生をさるる春とと

志もくの人経多し

ふきはちややまを晴し

今まの隙をうり寒をぬる

寒く果やむつあり

春風

春風

春風

春風

春風

春風

春風

春風

春風

春風

室梅

室の梅出し一都春を色あは

室は梅結く川柳のひまあり

ふらふらと一と咲入り

日向の節をたよりて咲やふゆの梅

体梅は仕るのちおどし冬乃らぬ

向のよれ眺るる梅やぬ遊の梅

咲とけりる梅もさき申し

枝もよも寛きえんはゆゆの梅

室梅や一白盤けりる庭つ

きく室をたしなむ冬の梅

花てくうる梅一飯の味

梅菜

春風

春風

春風

春風

春風

春風

春風

春風

春風

春風

河梅

河梅は

梅は

梅は

梅は

梅は

梅は

春風

春風

春風

春風

春風

集きりしちみりうの箸 汀砂

生海嵐園のたき鳴のこ 柳まふまふ北 木曉

盛智へ集せてこく生海嵐さ 安女

若丸しゆ海ひをうきなふころふ 桑野

ぬくくと組立へた生海嵐う所 一理

何ふみそみそをきこいせも丹 深志

たき唐や風よきううふ北の強と 寶水

朝明や母をらりよふたりの色 桑野

きぬくのせぬよりうりくぬあ香 集之

干菜の傷み越との海 柳 糸柳

干菜志志ふと 並行 糸柳

己さとりれまぬに中 干菜水 結吉

邪广外一糸木も用立也 干菜 作煤

毛を引ふる志とんあうと 洗ひ葱 染堂

風呂吹 風呂吹や 中の積りたる 鍋の尻 毒友

楓呂吹 楓呂吹 又 糸柳 仲間 吹き けりり 毒月

梅吹 梅吹の程のぬきも や 糸柳 けりり 木和

吾のとりきりも 糸柳 けりり 良大

料理屋の言まぬけりり 糸柳 けりり 未成

納豆のぬきりり 糸柳 けりり 雪袋

組板へ納豆 糸柳 けりり 月丸

糸柳 糸柳 けりり 糸柳 けりり 一理喜

み指

鬼あきみ候よりみあ梅へくち

乙瓢

み筆

井の是れもあふと出てきうはへ
よきことよてつうハ出てぬ遊古も理
あふ香あふよよからたうゆそ務
あふ結帳こりてきてふゆそり
葉用よよ改ききやフしそ筆
啄まきゆのあふもふのそ冬冬 筆
人あをさふもたまきりぬ申録に
ひつそつうききき果梅や冬冬
口あきりきききききききききき

一 一 月 一 一
一 一 一 一 一
二 一 一 一 一
如 水 友 友
聖 草

師老

流りくと師老知るまやぬあう

逸海

子始

柳ひらけくや能も志もんり
梅あゆもやも師老のりし来外
子をあふきききききききききき
付きききききききききききき
梅咲て志もんりあふはけれきり
流きよる来乃白きききききき
相愛のふゆきききききききき
梅ハとわききききききききき
葉の何のききききききききき
霞きききききききききききき

井之
号
初
寶
清
峰
安
主
女
女
女

寒多併の以ハ 藪草如ける 三 寒多併 峰道

手宛て紙よ水 一 寒多併 一文

冬 寒多併の以ハ 藪草如ける 三 寒多併 峰道

冬 寒多併の以ハ 藪草如ける 三 寒多併 峰道

冬 寒多併の以ハ 藪草如ける 三 寒多併 峰道

冬 寒多併の以ハ 藪草如ける 三 寒多併 峰道

冬 寒多併の以ハ 藪草如ける 三 寒多併 峰道

冬 寒多併の以ハ 藪草如ける 三 寒多併 峰道

冬 寒多併の以ハ 藪草如ける 三 寒多併 峰道

冬 寒多併の以ハ 藪草如ける 三 寒多併 峰道

炭電

甘こうはるや 苗りし水 三 寒多併 峰道

きみりま ちを 一 支もちの 有 寒多併 峰道

すみ電や 何 交か 一の ぼろ ぬり 寒多併 峰道

たしん ち 何 越り 落す 日 一 寒多併 峰道

ねく せき 子 割 者 ち 起 ち 寒多併 峰道

用形 一の 何 ち び ち ね 一 寒多併 峰道

長と 妻の ち 何 一 山 一 寒多併 峰道

際 傳 居 て 厄 所 ち 寒 多 併 峰 道

漸と け ち ち 何 ち ぬ 一 寒 多 併 峰 道

あふ け ち ち 何 ち ぬ 一 寒 多 併 峰 道

すくう ち 何 ち 寒 多 併 峰 道

炭園

用形 一の 何 ち び ち ね 一 寒多併 峰道

長と 妻の ち 何 一 山 一 寒多併 峰道

際 傳 居 て 厄 所 ち 寒 多 併 峰 道

漸と け ち ち 何 ち ぬ 一 寒 多 併 峰 道

あふ け ち ち 何 ち ぬ 一 寒 多 併 峰 道

すくう ち 何 ち 寒 多 併 峰 道

措

火のつらぬきのあつちうばうあり
取人の火よりそよゆりかきみじ
まきの強きをくめしてほと火うま
浪茶うまよえをとよま措火は
措古まねるもあても本あつめ外
あつて来りつづねあつては措火は
まきのつらぬきのあつちうばうあり
あつちうばうありとわげた
あつちうばうありとわげた
あつちうばうありとわげた
あつちうばうありとわげた
あつちうばうありとわげた
あつちうばうありとわげた

芳臨 山月 薬玉 采砵 二極 相林 永年 芥舎 八四五 梅保 静愛

火桶

火鉢

巨燧

埋火

湯罍

子の敵は我と名づく、火鉢の丸
よこしぬぬえうつ以我火鉢は
炭火よりあつちうばうありとわげた
よまの壁ハせ海ハあつちうばうありとわげた
燈籠のあつちうばうありとわげた
くわのあつちうばうありとわげた
あつちうばうありとわげた
あつちうばうありとわげた
あつちうばうありとわげた
あつちうばうありとわげた
あつちうばうありとわげた
あつちうばうありとわげた
あつちうばうありとわげた
あつちうばうありとわげた
あつちうばうありとわげた
あつちうばうありとわげた
あつちうばうありとわげた
あつちうばうありとわげた

あつちう 待ら 竹ら 文車 俄友 遠沿 夷方 聖井 静水 文頂 弟欣

象

神もふるふふ麻呂なり残ふ以事 一西馬

心はよりもよき麻味心の象 宇山

心はより先あり神ぬぬの子ま 一理春

心はより宿や象ふまを為弟志 悠志

心はよりやうよ着て了る蒲島計 静々

心はより傳子のとくよく浅水山 奈凡

心はよりたやうと思ふかこ子山 奈野

心はよりまき言娘日おまらみおら 西来

心はより出下り兄世もるや象の衣都 志善

心はより物や孩子も象人よ亭下 俄五

山中

山中一投きみる山中のやまに机あり 一西馬

山中若て成事の出て一人旅 一為

山中松を通る覚悟の片きんが 夏丸

兄を先や改申のあり一人の立 山事

山越てうらゝるゑ取う山中北 婿良

もけう理もはまんの山名都に 聖井

朝夕よりまきう一是象。右左り 象古

子よ古事の中まきまは是皆小知礼危 来之

心はより一も臨皮中一も 象古

是象もも麻味あり迄老より 徳輔

冬の中も麻下り一も麻味一のみ 琴堂

つらみのまきま麻下りぬ由りやま 象古

是象

その由

七

十一

年忌	衣冠	鬼外	追儂	朱洗	鬼外	追儂	朱洗
やく朱木と侍着たてや年ウツ	先の日や、のぞくや、あつや、衣ははり 氣配まのたぬ、のちや、あつや、	鬼ハ外ハ外 二度めよと、あつや、あつや、あつや、	ひらたまや、あつや、あつや、あつや、	うめの木、あつや、あつや、あつや、	あつや、あつや、あつや、あつや、	あつや、あつや、あつや、あつや、	あつや、あつや、あつや、あつや、
祭衣	赤衣	一角丈	友昇	青豆	角雄	友昇	青豆

年忌	衣冠	鬼外	追儂	朱洗	鬼外	追儂	朱洗
やく朱木と侍着たてや年ウツ	先の日や、のぞくや、あつや、衣ははり 氣配まのたぬ、のちや、あつや、	鬼ハ外ハ外 二度めよと、あつや、あつや、あつや、	ひらたまや、あつや、あつや、あつや、	うめの木、あつや、あつや、あつや、	あつや、あつや、あつや、あつや、	あつや、あつや、あつや、あつや、	あつや、あつや、あつや、あつや、
祭衣	赤衣	一角丈	友昇	青豆	角雄	友昇	青豆

新候森頼の森さる人又びらの鳴り水 案派
園見 ころせりまゝさるけり正とんじ 花月

小海口 赤門や小浜よりふれ人出入 一井
お足下てことおんも神一からり 来之

大磯の 鐘のよくゆゆるおん大三十日 仰見
えん中よりぬきまぬ一古ぬ日 森山

やまきき一庭友のさぬや太平の 交車
やまきき一庭友のさぬや太平の 一理者

除夜 人層乃果数や除夜の懐手 成年
明けよ新なるさるやうくと除夜の人 慶喜

うき少侍もめさる内四除夜の鐘 一燈籠

年比 海よりお家あり町もさるは春 柳圃
ままのの春人の世よおたれさる 慶喜

この山崎少将を鳴りや年のうち 深月
所そまのあ日七日のたれよ

海一留理て川崎の驛に堂一と 深月
この山崎少将を鳴りや年のうち

この山崎少将を鳴りや年のうち 深月
海一留理て川崎の驛に堂一と

この山崎少将を鳴りや年のうち 深月
海一留理て川崎の驛に堂一と

新仙の喜之部

梅	梅	梅	梅	梅	梅	梅	梅	梅	梅
散	散	散	散	散	散	散	散	散	散
を	を	を	を	を	を	を	を	を	を
と	と	と	と	と	と	と	と	と	と
を	を	を	を	を	を	を	を	を	を
兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
か	か	か	か	か	か	か	か	か	か
もの	もの	もの	もの	もの	もの	もの	もの	もの	もの
車	井	毒	草	車	車	車	車	車	車

善

三

浪札の申うつらも骨は更なり
心毒味は傳 思ぬくや 鯉
聖物よき處をやくは少やうて
娘とらたいをーきなる
有らぐはのま 極はれ伐う
赤例通りなり配ふ忍り
立居まおこもらるや成なる子絶
足手あふふハももそかき
花雪は程中く空のうきくを理
口永ふうあり 換な回とあ
煙をふきくは心をいへ茶を入て

井 毒 車 草 井 毒 車 井 毒 車

かまのうら甚々なり。か退屋
在り毒は傳とや或ー怒の皮
子よりも猶やいの毒、うらる
お銀を不敷欠きぬはと気好き
伝承るやら。毒を 笛の音
町うらとあう終もき結り
毒は飲む月ーいとふ口お粉
うけおあううらる人乃目を懸ひ
肉漏るなる 村のまゆあひ
楽鏡の鏡乃史志欠寸られの自
望ー毒つーー四石の毒

毒 井 毒 車 毒 井 毒 車 毒 井 毒 車

踏込込く垣根の字もそみこり
 踏目の弘ゆいなく信印
 叔ふしより踏束の悪いのり細る
 妙き場をきりてつゆ 提桶
 せぬ喉て神達のさー因意の
 日さへ 昇ねる人むねく
 車 井 子

幸筈へ只ーと通ふ 嵐うあ
 ちさき以返はよおやま 掃かき
 春友 春友

朱の赤も志ふは長第両門士して
 とほ九舟見てもふかぬさち
 積みとー線高よ月のきーりり
 働くくちハヤ初えも きぬ
 懐京身は筆のふ入よ気春友の
 善徳のあとに庭の 大徳居
 杭一本おたをりのの 鬼門よけ
 及添茂また望もはーりあふ
 品尺の帯もちたふお程婦とま
 い善保へあやう宿のまやま
 冬枯茂月のまのてよふけーた
 井 嘆 友 井 嘆 友 井 嘆 友 井 嘆 友

人小はねがけ祭る 甲子
仕合しとちとて引ぬ海は風部
世間存しあるやうな構着
骨見合又もあつてらみはぐし
野風燈へくらき水ぬるむと
りか永支ゆまんよ盛の甲茂地
女商自海んうましくち痛
免よかしの納款しそ歌もこし
朽木の根うら 龍蟻まひるり
垣外の茂里し 蕪の落くらく
袋ふふきもる帳の持引え

井 嘆 友 井 嘆 友 井 嘆 友 井 嘆

二三年ゆつと 松もしとて初更
一刀海の 家法 あ 傳
新酒も法座の鼓小いきてれ支
志とてきら部一 踊くこぬら
も好き書を抄ききこる月夜さし
繩手はさう 何きさ終まれ
進々又茶店もぬえて振はし
屋根もひさしも塙の貝かふ
木架の崎とひ人の多ちやまう
雞設うす城よけると海部
手裏の海しと何せハ奇麗な高り

友 井 嘆 友 井 嘆 友 井 嘆 友 井 嘆

志はくくまよたのつ候ゆき

井

凍解やまたきちせよ山業初起

雪井

中き 耐よ終るつりのさへはり

雪井

暮あふ冬あつりさほ里て

井

愧のくちん ちと風のすゑる

井

月の秋旅もおもえんちち出母来

井

田のうくの空めをのり初の春

井

けの突もふ自由のちあふ前とき

井

山根通里りいんえうきるち

井

細長う入間初ち以り 古ここ

井

蝶さあしきつう隙るる

井

供あはとれく知れと舊ね織

井

月よ満るく軒は改をり大

井

足代乃知ける丸本を積あきね

井

何よとくして保利よ起 所

井

醫者より又尊子うさよ魚の舞りく

井

萱あし草あし ちとち 輪

井

さしはよ蒼りちちる ぶの枝

井

そよとすれは毒ゆるけり也

井

早立より急いで 神まうて
 紙のうらむる くらき免をうてま
 傘さしてうらむる くらき免をうてま
 古き巻物の 紙のうらむる くらき免をうてま
 長押のうらむる 紙のうらむる くらき免をうてま
 けまはれおけとふふと 解
 枯別荘のうらむる 紙のうらむる くらき免をうてま
 本津のうらむる 紙のうらむる くらき免をうてま
 まけ合は馬と車の 志すうてま
 味お場と月 八羽の せう
 夕月のうらむる 紙のうらむる くらき免をうてま

彼岸のうらむる 紙のうらむる くらき免をうてま
 浅草ハハハ通り 紙のうらむる くらき免をうてま
 浅草ハハハ通り 紙のうらむる くらき免をうてま
 浅草ハハハ通り 紙のうらむる くらき免をうてま
 浅草ハハハ通り 紙のうらむる くらき免をうてま
 浅草ハハハ通り 紙のうらむる くらき免をうてま
 浅草ハハハ通り 紙のうらむる くらき免をうてま
 浅草ハハハ通り 紙のうらむる くらき免をうてま
 浅草ハハハ通り 紙のうらむる くらき免をうてま
 浅草ハハハ通り 紙のうらむる くらき免をうてま

芝居の儘てゝ色や 夕光の
 静 雲々
 友子と用ゑあひも 来能 一 天
 二階と結おろはるゝの月
 仕舞とられた海ノ村の 滅了
 如奈基も 三 止りそ菊のせそ
 やり乃羽をゆ 後事をけあむ
 船二計又いそ 札を くらひ米
 安房上総と 終 くらゆく雪
 憂こしおる事と くらく 橋の神

ちと間の悪くよほと 女子遊
 たれとあつたおたけ 是皆戸の世
 また徳すしてを和く 葉の標
 海や葉も 障り 東風の残す也
 酒乃つひに 冠引 月 くる
 ちり 舟より 歌て 月 見の 時も 未未
 踊申しこも 葉よ ありし 世 徒
 空るの地 震らる 世 ありし け
 と方ありし 用
 は此の後の 茂は 氷の け 全
 是くぬえの 具より 彩色

井 池 井 池 井 池 井 池 井 池 井 池

井 池 井 池 井 池 井 池 井 池 井 池

雑

大寺の園より涼しき ぬきらぬ
飼とくしらくしき ぬきらぬ
結人の ぬきらぬ ぬきらぬ 更し
おほゆききと ぬきらぬ ぬきらぬ
湯切きりぬきと ぬきらぬ ぬきらぬ
やつと一しき ぬきらぬ ぬきらぬ
ぬきらぬ ぬきらぬ ぬきらぬ ぬきらぬ
ぬきらぬ ぬきらぬ ぬきらぬ ぬきらぬ
ぬきらぬ ぬきらぬ ぬきらぬ ぬきらぬ
ぬきらぬ ぬきらぬ ぬきらぬ ぬきらぬ

池井池井池井池井池井池井池

いたしよりの園はあふき
俄雨傘かすくすぬの宿
烟草又の ぬきらぬ ぬきらぬ

井池井

池井

秋仙の夜の歌

苗あふみ川やささのうらまゝの福り 俄友
 ちりちりちりちり梅雨の只中 水壺
 とくくとくくとくときどきときどき 友
 本家よまけめ 身代ふたゝる 壺
 冬乃ちりやうけつせ月阿うり 友
 言教り一葉の引きおたぐ 壺
 築古ハ老たれやうはくはけぬ秋 友
 小まじり歌——て唯ふ養大 友

三十一

よゆをともすたむそ多ちも夢れし
こほも何てとなりぬ古まの
種もゆきそりり来の清きこめ
折減らさるゝ 宿の急の象
ひやくとまうへは月の子る影
鑑入る田の 象 さわうし
后の簾うらら古風ハ折ぬ 雲
そわも福念の 玉粒い 廻
小高きよふもわむろを夜廣げ
あくる雪蔭のしと枝ゆく丁
そま前よ清静するんををりり

友、友、友、友、友、

あんのをありも 燈籠窓挿
げと香もよほわかきぬ癖の付
女房のやうに温泉水をいふ
まゆき信の小袖奴忌わき 糸で
向ふり尺の音の引あり
何きて居るははの隙とむる
江戸店もちてくろしゆやの
高取の城は古鼓のけくきあく
稽古まりの左右よらふも
うまのたれてあもはほさる月
かまもふるりあある 船坊

友、友、友、友、友、

三十一

雲ふらつ 琳番やほの樂つ水更
 子河中 一もわとや 嘆えち
 炭原高橋子 幽谷の疎舎やつて
 出うは 何やも破き 役みよ
 ぬ月あすのハ 亦むの 嘆えしめ
 ふとく 生かす祖の 子己く
 左、雲、二、左

走馬は 添ふ如き 暮の ねくき流
 星ありくくと ちるみーち
 望井 峰月

首遠き ありき 月 来たり 秋
 相の 葉ふかしく 月 夜 志
 来の お場も 定海と 秋
 生身魂 昔かき 月 昔
 懐く 外里へ 志と 月 志
 花 通る 地は 茂き 月 志
 懐く 志先して 月 志
 彩り 下 余 茂き 月 志
 満き 月 志 月 志
 月 志 月 志 月 志

あらまゝの原の　くもの　雪
持扇をたぬ　くもの　くわつり魚
かけ墓の　はむと　ぬく　よ　来
若く　り　明　れ　を　け　ふ　ゆ　ま　も　遠　く
東風　よ　ゆ　ふ　れ　を　猪　牙　舟　の　つ　く
籠　を　る　を　か　ち　は　ち　や　も　不　河　治　候
お　ま　げ　ハ　あ　や　り　ぬ　け　る　　兎
石　石　木　と　客　挿　り　う　志　つ　て　て
新　生　流　る　を　ま　い　い　の　月
狐　火　も　鳴　け　の　ま　ろ　　長　け　く　こ
向　ひ　た　い　は　よ　人　乃　在　何　と　ぬ

月井桂　月井桂　月井桂　月井桂　月井桂

も　も　ま　の　癪　ま　は　は　る　夜　癪　舟
第　と　く　の　め　　化　粧　場　の　す　く
親　よ　あ　あ　と　　遊　る　客　と　役　者　も　ち
二　三　友　無　き　を　通　る　　端　編
魚　市　と　す　う　き　う　り　ま　を　と　登　の　自
お　ま　げ　の　め　も　あ　の　ま　つ　と　り
明　寺　の　蓮　の　実　も　と　や　花　尽　し　し
さ　り　ね　と　備　成　て　お　ま　げ
換　搦　う　満　を　極　ち　る　も　ち　あ　り　て
籬　輪　　細　ふ　う　い　豆　の　温　泉　土　産
挿　て　あ　る　あ　り　旭　の　あ　げ　と　た

月井桂　月井桂　月井桂　月井桂　月井桂

子信を合うてをさう書ふ時
陸

秋仙

秋部

さめく	や	喜	み	る	添	虫	も	形	野	井
そ	よ	を	ま	き	き	ら	あ	ら	き	月
揃	も	家	古	一	車	並	入	乃	井	井
力	自	得	乃	て	一	意	更	た	右	井
磁	や	ら	初	の	形	を	本	魂	の	心
ま	れ	り	を	り	一	鐘	く	ほ	り	る
左	井	右	井	友	井	井	井	井	井	井

秋

三

結成りも形む宿世の所は命
 細いあしはさきも色も汁
 病癪のいげんをえり極も
 新る志はしもあき 神の柳
 近も世傳く後つく嵐面もくま
 を愛中ころもあまよ
 望理きうに庄屋杖持たる月の秋
 毛ゆき 新ふ不味し 送り火
 松林裁法やうりのをさうけ言
 地のかけん傳子所をえん
 世の陰謀をよけくさふと

井 友 井 友 井 友 井 友 井 友 井 友 井 友 井 友 井 友

下戸もつと心さる 活潑
 長策きよと理回しもして
 阿乃難家々をりもる
 名は多しを公の以ては
 心人めり多人もあ
 先任の才子を傳拓く
 油を胡麻よかけり
 世心無石たし
 心ハ曲福へあし
 仕身りとも望う
 笑て香味よけ

井 友 井 友 井 友 井 友 井 友 井 友 井 友 井 友 井 友

有りて退きて月をむねの
 志ぬ村はかりたれも盗まぬ
 例幣は通しりあはしむる言は
 のた里取巻と結まらばよき
 法は風邪着松湯も飲よほすみ
 二百もほしき書文以りの深
 笑むと破速く解とつゝぬと
 たらこすりの前謝すぬぬぬ
 井 反 井 左 井 左 井 左

築場、うらさつたてて
 ころきり月の月くぬ 白く
 萩の波水標程ゆらく流ゆ
 切りのひまゝ 帯さつる
 土の都又の子あそぶ老る
 二枚一折又のあうはく
 地くらして高い一りの
 多うきり利の志れら 歯
 はおくしも出入のいふ
 高ちつしとと参ハヤ
 高ちつしとと参ハヤ
 南 春 南 春 南 春 南 春 南 春

通ぢりはき勢んるくの 水
 緒わりのみ余ほとみ安以奇ま
 り多ほくむるし揚うちを
 裁りりも緒をり何ふあきの月
 おひくくおも咲をろふ海
 徳の夜ちうい思ほとよき雲之
 旗燈の青きまをりし行く揚
 上持の子は鳴すし己よ答る祝
 小きれも兄弟委信の泣文
 所尻まをらつてみ思らいきひ
 弓はまもも可算り出白へ

浦 毒 菊 々 毒 浦 毒 浦 毒 浦 毒

白つそひりつて揚の毒よのり
 せ理系あをも中たけのやけ回
 鯉城とる袖よ思の之末しして
 人の煙子さかししうとあ
 袖よとし一文菓子の揚よもを
 初穂よりうる 所末曳の繩
 月影と時をもけのう旅うと里
 葦よ見とすく激のきししこ
 秋の蟬鳴うけおのこしとを
 るま干す盛 葉ある小 庭
 心燈へ葉丸多て けくをうら

毒 浦 毒 浦 毒 浦 毒 浦 毒 浦 毒

山乃不毒の 露口をまら
蒼む花 ちるを知らぬものま
あぢのそを焚くみそをさるる

秋のねや月のもらとまらと
おとねくを男業は戸の月
とまらまの暮を想ふはくまはる
御弁当の 夢を境 物まら
と終るはとよの以たまは城無終

俄口おのち埋まら
私雲へ移るを所けるまらく
黄のしを女村まらつむ
子のとくくけを能くまら
隠居 志くまら 筆子まら
たーなみてまらまらも兄を男
秋のまらまらまらまら
邪広まらまらまらまら
山まらまらまらまら
糸の宿の和まらまらまら
已刻、色終るまらまら

中一子のみききけ まい辨結を
才子を傳へしるすのきけらる
酒買うるをいふて少く物きと
少絲竹と戀の又たのれり
後日鳥はゆとく人の顔も那
秋伽のあまのたむ 家 傳
吾能よ願うてあきくきほを
多葉よと申す市のあらしを
地車小櫃の南本せ川を急言
草のけふとらるる若くあは
赤眼して噴るを申すはあか

馬井 井 井 井 井 井 井

ちよりの若て十日留ちを
月の生をまふせもあはく
おなよよかよる 穂巻列管
浮つくと杖の力の やや
舟庭のうねるあらし 中
舟船をわたりよ海をる意を
結病と志れすも水にのさつ
うれしめ枝をまてきてあは
屋もれほらなみくせ給さ

馬井 馬井 馬井 馬井 馬井 馬井

新仙約

冬之部

三十三才 富洞(り) 五返れりり

然志

干菜(り) 之(り) 才(り) 壺(り) 四(り) 中(り)

野井

船(り) 小(り) 積(り) 船(り) 儀(り) の 結(り) 也(り) 巧(り) く 多(り) 之(り) 了(り)

志

不(り) ぬ 時(り) 分(り) 二(り) 書(り) 活(り) け(り) 三(り) 出(り) 於(り)

井

く 町(り) 七(り) 月(り) の 交(り) 交(り) 二(り) 振(り) 付(り) 一(り) 皇(り)

志

火(り) 之(り) 幸(り) き 酒(り) も よ(り) う 養(り) 二(り)

井

お生焚那人をりり亭舎久らこ
一田りりやんや日枝あり一ふく
古のたつらら燃双赤 立中ら一
森うちり瀧を片絲よ苦もやむ
皆と旅を名さて送る生松魚島
田ら急一 まるま際の時く月
計るるも水盛の たりとさうけ
清き山か古ぬけしよん寺垣
三階くらま一つの中尺ゆる吾書指
料理古れらよ いかにさしん成
吐候は古清上阿のもしゆらこ
志井志井志井志井志井志

野地は程の音とら一 古那一
舞地は程の音とら一 古那一
ららちりたのき茶塚の 石
懸壁の人おハ被布も結水清杭
今四五日ものへる茶の舎
之盛ハ初ららもやき 砂子壁
漸冬より 形垂一 形起
簾架かく葉も ちうく向ふ一
水おとほむの傳ふるんをふ
忘れまハ夢の如くあふりもま
出雲の神より一 世も那 形かけ
志井志井志井志井志井志

乃かてよ西山のけを思ふ月
 井 ひとつを李として礎 少ゆ
 井 やまの焚火のこゝに 能く
 井 山をいりみ頼子け 天
 井 百姓半遊世 ありの
 井 葉家の軒より 竹
 井 花をきたしく 田造り
 井 めるよとまきの名より

香の煮る 醜 ちりーまろり 竹
 竹 節のりみりの 竹 とう
 竹 撥きてー 蕙のまつも 竹
 竹 志とみ斗里を 竹
 竹 せつとしかるもは 竹
 竹 志とみ斗里を 竹
 竹 せつとしかるもは 竹
 竹 聖よ 竹
 竹 棒を 竹
 竹 すと 竹
 竹 一首の歌を 竹
 竹 其の自を 竹

彼岸を焚く傳 田舎水もあ
 年玉をちかふるらよ持てあそ
 俄にふと息を絶たれりそふ
 九里精

法多院にちかふらつあそぶる
 松木あつみ一考ト冬、これ
 為庄へ楓流をいさなうて
 火程のまぢなひけやう母を
 細くお山の端へいさなうて
 如葉 席名 菊

法多院にちかふらつあそぶる
 松木あつみ一考ト冬、これ
 為庄へ楓流をいさなうて
 火程のまぢなひけやう母を
 細くお山の端へいさなうて
 仲人の恩も忘るべきや
 桑もふへよ仲す懐石の志
 楓流のまぢなひけやう母を
 廣極のまぢなひけやう母を
 月乃馬をいさなうて
 結のお場も ねぬをいさなうて
 酒の壺もいさなうて
 何れもいさなうて

井 石 燕 井 菊 燕 名 菊 井 石 燕

草部 ぬハ よろ ころ ころ 花 花 花
ひら 二文の 通り ころ ころ ころ
あき 那基を 打と 日 永の 為 咲く
葉 振の 水をつい 籠 籠 籠
木 嵐の 垣 根 傳 伝 伝 伝 伝 伝
ころり 重 ころり 又 又 又 又 又
杖の 布 漸 久 一本 切 ころり ころり
あ 燈 燈 燈 燈 燈 燈 燈 燈 燈
明日 ころり 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳
高 望 あつ け ける 喜 も 孫 も 喜
何 ころり 彼 も ころり 喜 も 喜 も 喜 も

井 葉 石 井 葉 石 井 葉 石 井 葉 石

二の 月 月の くら くら くら くら
あ ころり ころり ころり ころり ころり
袋 ころり ころり ころり ころり ころり
年 号 の ころり は り め ころり ころり
見 ころり ころり ころり ころり ころり
産 物 も ころり ころり ころり ころり ころり
を 籠 籠 籠 籠 籠 籠 籠 籠
た 由 ころり ころり ころり ころり ころり
喜 の け ころり ころり ころり ころり ころり

石 葉 井 葉 石 井 葉 石 井 葉 石

海川大櫻守つりまゝの時

神宮やうけかゝりまゝけりし之細前

浮森けふれて旭より即又宮 一程喜

先は詔中しゆを菓子受家々神 俄友

状乃苗名をまた出でて見る 脚井

冬うへそくよそを路は程ひま 友

重の平きを画し仕たうりまゝ 友

月あねを一一月浦きりふ葉を 井

清くさほとあをぬぬや宮 友

獨来とあふまゝ一ひ葉まきり 友

言くち 這入飛舞りぬ 置

御立の氣持ひをくも占りて 友

さけすみ笑ふらつともえり 友

まゝ焼く涼しと又ゆる回葉をち 井

神の社丹の葉も志まうりよき 友

家より子供れえを徳を尊し向 友

かゝりかけぬり船をあの船 井

かゝりかけぬり船をあの船 井

かゝりかけぬり船をあの船 井

かゝりかけぬり船をあの船 井

かゝりかけぬり船をあの船 井

庭のけし教門も所も奇素なり 友

能の音もなほそのれあり
 宛峰の葉をも怖れぬ 幸とも
 堤のうらみはけいちの解ゆる
 持のまなきらりやまの売成布
 旅籠の葉と砂の毒いさら
 案か起し我れとて書ちり
 又も西聲のあてのけり
 さいくよ那れ 美天もよよ
 日かげの表もはや前より
 神なるまきささふ糸直の隙も
 縁手乃りの猫尻といやう

井 友 毒 井 友 毒 井 友 毒 井 友 毒

初めけよ成る地を志まうや
 まい月いとうらねを
 出きせらへ海を海し
 せりおや中を喰け
 石灰の儘つく利もく
 いまへハけつく障れ
 よえおてまうも
 云勝七も
 泊るぬり
 初風呂
 吉友右

井 友 毒 井 友 毒 井 友 毒 井 友 毒

あもて向ふも志めぬたら草
森時分残るる影りよさゆる月
入江のあゝうきなる志らく
吹流のあ思致さぬ一と 何なるか
滅きも積や ぬくもあまの積
とぬやりの花見もさけみ世を逐理
あ和希をあけよよき日初待
藤玉乃為替る事とつ 彼岸あ
煙管をくすほと打く 灰ふき
利を持し公事珠と置ていゆく
芝やまへんの杉を ぞくぞく

友 毒 井 友 毒 井 毒 毒 井 友 毒

ちけいも成 然の之乃は毒結
ついで一二獲すく寸流し
押へる毒をこつた毒絲ち了路し
能まうてうく恥と 血の初世
あふ動はとうははぬ 世帯向
禪ひれはくく乃井 戸もこ
分列鬼門をよけて 志毒し
をらも間よ 入し一之の月
知己のくく 強るお撲 毒焚
神田茶つてし月一町内りせして
古長屋よ半あはる毒泊てあき

友 井 毒 友 井 毒 友 井 毒 友 井 毒

云々出たあひハ唯々まきまき
代極度仕高て智しーおくらま
おやまきいた 年録のし毛
一通ハ物めるまきま ぬ度し品
炭燈けー舞 まきくしめ款
えりやい地ハまきまのまき雪粒
かーんをほまきま 洗ふまき
獨りまきままきままきま
とまきままきま 跡まきま
系とまきままきままきま
まきままきままきま

井 友 井 友 井 友 井 友 井 友 井 友 井 友

治やらまきままきま
よう尻まきままきま
けまきまのまきまの後まきま
掃除まきままきま
向まきままきま
まきま提燈まきま
おぬまきまハ物まきま
まきままきま 苦のあまきま
我まきままきま
まきまのまきままきま
まきまのまきま

井 友 井 友 井 友 井 友 井 友 井 友 井 友

何と口も味くともよの愛恋
何一つめを 目もなうとも月の 影も
つしーも昔うのさるき 縁締
延たまのしほきよ来し 月も會
霞茂くほきぬ 秋結とあき
秋始と心 恋慕 御貸すしきり
念子念入る 藤の戸しー戸理
出とーしーゆちんま づーく 塵埃 垢
蛇籠たーくへき 西用 札川
年号のかけりて ころと 世と 盡り
抱ひら ころらよ 画 踏し てるる

井 友 春 井 友 春 井 友 春 井 友 春

ころと 世と 盡り
抱ひら ころらよ 画 踏し てるる
米多 盡さ けの 何より 比 なる

春 集

